

郷土芸能

宇土の歌舞伎

宇土地区は静かな山間の地区で、農林業を営む住民たちの娯楽の一つに祇園祭りの芸能があった。

慶応生まれの杉本藤三郎は浄瑠璃じょうるりの語り手であった。

明治30年頃、「江戸で歌舞伎役者をしていた三郎という人が帰郷して瀬戸（志柿町）に住んでいる」との噂を聞き、その技法を伝授してもらおうと藤三郎は数名を伴い瀬戸せりふに出向き、数日間にわたり、歌舞伎の台詞で、つらね・渡り台詞・厄払いやくなどを覚え、歌舞伎独特の所作である見得みえ・六法・段切り・殺陣たての手ほどきを受けたり、かつらの付け方、顔のつくり方（化粧）、舞台掛けなどが詳細に伝授された。

地区民総出により舞台が完成した。舞台は志賀さまと祇園さまを祭ってある山頂広場に建てられ、間口が3間、奥行2間、中央に上座右側高段に浄瑠璃棚、舞台幕も新調した。

二間の花道を設け、舞台下段左右には松明たいまつの灯台を設置して、旧暦6月15日の祭礼日が初公演である。前夜祭には、評判を聞き付けた見物人で広場を埋め尽くした。こうして習いたての歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」が上演された。

年々あまりの好評に地区民総出演となり、衣装の鎧・兜・袴（5・6着）・かつら（20数個）・舞踊の着物数着が準備され、小道具の刀（30本）・小鼓・三味線・笛・太鼓・鉦などが揃えられ祇園歌舞伎は最盛期を迎えた。

しかし、歌舞伎や浄瑠璃は覚えるのが大変で、誰にでもできると言うわけにはいかなかった。藤三郎の死後は後継者がいなくなり宇土の歌舞伎は中止せざるを得なかった。

祇園踊りの継続を望む声が高まり、当時流行の浪花節を習っていた杉本末芳は芝居の脚本を書き「まげもの芝居」を手掛けた。「国定忠治」のやくざものや敵討ち、母ものに人気があった。

上演された演目は、かなりの数に上り、長老の話や記録によると、次の通りである。

いちのたにふたば
一 谷 嫩 軍記（陣屋の段）並木宗輔

絵本太功記（尼崎の段）近松柳、他

鎌倉三代記（三浦別れの段）不詳

近江源氏先陣館（盛綱陣屋の段）近松半二

本朝二十四孝 近松半二

けいせいあわのなると
傾城阿波鳴門 近松半二

仮名手本忠臣蔵

（戸塚山中の場、山崎街道鉄砲渡しの場、二つ玉の場）出雲

菅原伝授手習鑑かがみ（寺小屋の段、車曳きの段）千柳

義経千本桜（吉野山道行の場）松洛

神霊矢口渡し 福内鬼外（平賀源内）

あしやとうまんおおうちかがみ
蘆屋道満大内鑑 竹田出雲

勸進帳（歌舞伎十八番の内）並木五瓶
 土蜘蛛（新古演劇十種の内）河竹黙阿弥
 青砥稿花紅彩画（弁天小僧）黙阿弥
 天衣紛上野初花（河内山直侍）黙阿弥
 三人吉三廓 初 買（三人吉三）黙阿弥
 梅雨小袖昔八丈（髪結新三）黙阿弥
 与話情浮名横櫛（切られ与三）瀬川如臈
 東海道四谷怪談（四谷怪談）鶴屋南北
 番町皿屋敷・修禅寺物語 岡本綺堂
 屋上の狂人・父帰る 菊池寛
 瞼の母 長谷川伸 等である。

歌舞伎については浄瑠璃、常盤津、清元、長唄などの演出効果が不可能なため、短縮したり触りの部分だけの上演であった。

戦後、敬老会や鈴木神社の祭りには宇土地区民により現代劇や舞踊などを発表した。



また、青年団でも彼らに演技指導を受け演劇活動を始めたが、昭和三十六年以降は、途絶えてしまった。

その後、歌舞伎の復活を唱える有志が集まり、衣装・かつらを揃え、平成五年の市民文化祭において勸進帳「義経三本桜」を発表し好評を博した。



昭和58年、鈴木重成公没後330年を描いた創作劇「島の夜明け」が上演さ

祭には、鈴木重成公
れた。

平成15年の鈴木重成公没後350年上演され、鈴木重成生誕地の豊田市から訪れた人々も感慨深げに鑑賞していた。

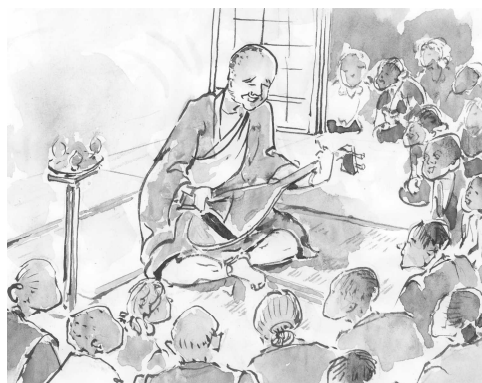
祭では、「島の礎」が

琵琶法師

明治30年頃、鶴地区の江崎初太郎（産婆ヨネの夫）は三池の建築現場で爆破作業中失明し、琵琶法師（検校）となった。

後に、数人の弟子を抱え各地を巡業した。娯楽の少なかつた当時としては大きな反響を呼んだという。

玉名郡南関町小原の山鹿教演さん（無形文化財、明治35年生れ）は、弟子として大正14年まで鶴の江崎家で修業した数少ない肥後琵琶の継承者である。



虫追い太鼓

戦後途絶えていたが、昭和45年、本町青年団が平床から太鼓を譲り受けて、故老に笛・太鼓の打ち方や踊り方を習い、鉦・小太鼓・旗・半纏などを取揃え練習を重ねて郷土芸能「虫追い太鼓踊り」を伝承している。

町内行事や青年祭などに出場して、直系1. 1杵、重さ50kgもある大太鼓を、勇壮なバチさばきで打ち鳴らしながら踊る「虫追い太鼓踊り」を披露している。

平床の虫追い太鼓踊り

平床地区に古くから伝わる豊作祈願の行事として「虫追い太鼓踊り」がある。地区の故老によると「当地に住み着いた平家の落人が、戦の勝利を祈願する勝鬨太鼓を打ち鳴らし、水稻の病害虫を追い払ったのがはじまり」だと言われており、市ノ瀬めがね橋の開通式、繭一万貫達成の祝いにも招かれて披露した。

福岡の虫追い太鼓踊り

福岡地区でも虫追い祭りの行事があったと言われ、虫追い太鼓が保存されていた。

十数人の若者が笛や大太鼓を打ち鳴らして太鼓踊りを披露し、各戸に用意されたお御酒を頂いて地区内を練り歩く、和やかな祭りである。

いつごろから始まったのかは定かではないが、戦前までは行なわれていたという。

その後しばらく途絶えていたが、昭和55年、青壮年会によって地域起こし活動の一環として「虫追い太鼓」が復活され町内行事にも出演している。



鶴の虫追い太鼓踊り

鶴地区でも虫追い祭りが行われ、太鼓踊りをしていた。平床上・下・福岡・鶴の四地区が本村神社の境内で合同奉納の競演が行われていたと言われている。

[トップページへ戻る](#)